

○千葉よう子\* 吉田清一郎\*\*

(\*仙台白百合短大,\*\*宮城学院女子大)

【目的】従来の増し目・減らし目によらない製図を考える基礎的試料を得るための検討を行う目的として前報<sup>1)</sup>では、棒針の太さの変化による編み目の大きさとゲージの応用としてセーターを試作した。本研究では、毛糸の種類を中細と極細の番手の細い糸について同様な方法で、中衣着ベストの試作を行った。

【方法】手編み毛糸は、ベストに合わせて中細毛糸（ウール100%）1本どりと極細（毛35%アクリル65%）2本どりの2種類の試料で行った。編みゲージの試料は棒針3号から棒針10号での号数を用いて、30目30段の編み地を作成し、その形状や嗜好性を調べた。さらに、中細1本どりの編み地と極細2本どりの編み地の作品への影響や着用感と手触り感などの比較を試みた。

【結果】前回並太毛糸のセーターゲージグラフを作成し、体型に適合した作品を得ることが出来たので、その応用として中細・極細を用いてゲージグラフを作成し、中衣ベストの試作を行った。その結果、セーターの場合と同様に体型に適合した作品が得られた。市販毛糸ラベル表示の標準棒針号数は、細針で編むように指示されているが、号数を変化させ棒針の号数を使い分けることによって編み地の形状からの違和感はなく、体型に適合する作品へと仕上がった。襟・袖・肩など部位が変化をする箇所には、棒針の太さの変化と伏せ留めの組み合わせによって対応した。このことにより編み目を生かした状態での作品が出来、また編み目に掛かる荷重を分散すると考えられる。ベストの着用感と手触り感の中細1本どり編み地より極細2本どり編み地のほうが表面が滑らかで、編み地に安定性のある形状が認められた。1)千葉、吉田：日本家政学会第51回大会研究発表要旨集、p. 203, (1999)